

Title	不安神経症患者との面接例
Author(s)	氏原, 寛
Citation	大阪外国語大学学報. 38 p.207-p.222
Issue Date	1977-03-15
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80617
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

不安神経症患者との面接例

氏 原 寛

A case study of an anxiety neurotic

Hiroshi UJIHARA

Recently the number of long-absent workers is increasing. The causes vary from their ages, positions, sexes, etc., but the author thinks it possible to find some types among them. In order to arrive at the above goal, however, lots of case studies should be accumulated. This is the report of a case of thirty-five-year-old married male who was diagnosed as an anxiety neurotic. Through forty interviews for eighteen months, there seems to be betterments. So-called “paternity realization” failed to be taken in when he became old, and this failure appeared as an escape from reality. Following the counselling process, his birth and breeding history and home background have been taken into consideration and we are sure that the recovery was found in his finding in his relative position in this world.

はじめに

最近、各職場内で長期欠勤の数が増加しているようである。それも年齢・地位・性別などと一緒に関わりがあるとは思えない。だから、現象としては同じ長期欠勤でも、それぞれの心理的背景はかなり異っていると考えられる。中には、むしろ社会的要因を強調した方がよいようなケースもあるが、それが個人の問題として現れる時には、やはり心理的問題に還元しうる。もちろん、すべての心理的問題を社会的要因に還元することも可能であるけれども、何れにしろ今の時点では、こうした長期欠勤について一般的な理論構成を試みるよりも、個々のケースを集積することの方が必要と思っている。また、ある程度の類型化が可能かもしれない。その意味で今までいくつかのケースを報告してきた（氏原1974、1975）が、今回は、それらよりも年齢が上の既婚のケースについて述べることにする。

症例

この人は技術系の高校卒の社員で、初回面接時35才、結婚して5年目、子どもはなく両親と未婚の妹が同居している。某大学病院精神科受診、不安神経症と診断され投薬治療をうけている。

父親が少し変っているが、とくに目立った遺伝負因はない。企業内の健康管理センターにある精神衛生クリニックに来所し、そこで約1年半のカウンセリング（無料）をうけている。詳細は以下の「経過」に譲るが、現在なお継続中のケースである。

経過

（なお、はじめの3回はインテーク面接で、インテーカーとカウンセラーとは別人である。）

第1回 5, 22,

（ノイローゼと診断されたがこれからの事を相談したい旨あらかじめ電話の上,来所)すでに1ヵ月程休んでいる。会社を辞めたいのだが住宅貸付金を200万程借りている。退職金で間に合うだろうか。工業高校を出てすぐ就職したが、技術を生かす現場ではなくて、企画中心の職場に配置された。五年前の異動で現在のポストに変わり、技術家としての仕事をするようになったが、10年余りのブランクのため、高校卒業時の技術を発揮できない。同期入社の者とかかなり差がある。仕事のことで文句をいわれたことはないが、同じ程度の仕事をしている若い人より給料の多いのが心苦しい。35才で最後のチャンスと思っているし、上司も然るべき所に異動すれば気分も変わるだろう、と言ってくれているが、そこで又入社何年にもなる技術家として期待されるのはやはり負担である。ずるく考えれば、病欠とか休職の制度を利用できるのだが、それも気が進まない。しかし扶養家族もあることだし、気分だけにかかずらう余裕はない。病院で総合的な診断が出てから、もう一度考えてみたい。家でアイロンをひっくり返して火傷をして、そのためにも医者通いしている。以前から、つまずいたり物を落すことがよくある。しかし脳波検査の必要はないといわれている。

第2回 6, 13,

前回より明るい感じ。ただし話す時顔がけいれんし声がひっきり気味である。昨日病院では血圧が170から130に減っていた。しかし強迫観念があるとのことで、又1ヵ月の診断書が出た。自分ではだいぶよくなったと思うが、家族は、私がイライラと歩き回るとか、のみかけのタバコをあちこちに置きっ放しにしている、などという。物忘れがひどくなって、置き忘れた物を探しているのを言っているのだと思う。高校時代無銭旅行で知り合った寺に2週間程こもり、その後四国旅行に行ってきた。これから会社へ診断書を持ってゆく。今までは取りに来てもらっていた。皆に迷惑をかけ済まないと思っているが、辞める決心をしたので今は余り気にならない。辞めればパース（建物完成図）の仕事をやりたい。仕事として成り立つかどうかとも知らないし、軌道に乗るのに早くても1年にかかるだろう。その間、アルバイトしてでもやってゆく。1日16時間働くつもりならやれると思う。組織の一部というより自己完結できる仕事をやりたい。絵が好きだし、小説家にもなりたかった。童話やエッセイなど相当書いている。金があれば自費出版したい位である。某一期校の文学部に合格したのだが、家庭の事情で行けなかった。休んでいる間に原稿を整理したが、高校時代の方がよいものが書けていた。今まで自分の進路について大人として

考えたことがない。ここいらで納得できる方向に進みたい。30才の時、これからチャンとやらなければと思い、職場に適応しようと努めてきた。職場ではマジメという評判である。そんなこともこうなった原因の一つと思う。しかしこれといった技術が身につかぬ儘なので劣等感が強い。今の状態で決断するな、とも言われているので、ノイローゼが治ってから暫く勤め、それから辞めるかどうかを決めたい。家内は、5年ごとにノイローゼになるのなら会社を辞めた方がよいかもしれぬ、と言ってくれている。家族は両親と家内との4人。姉妹はみんな結婚して出ている。(既述のように、本当はもう一人未婚の妹が同居している。)妻は一度流産しもう子どもはできないかもしれない。恋愛結婚ではないが近所に住んでいて、お互いに以前から知っていた。

第3回 6, 18,

課長から、長期に休むようならそれなりに考えねばならぬこともあるしどんな具合いか、と訊ねられた。休職の制度について教えてほしい。今は週1度医者に通っている。眠れないので薬をのんでいる。朝4時半頃に目がさめるので、自転車で1時間程散歩する。眠っている間は熟睡している、と妻は言っている。

第4回 6, 28,

就職当初は一時はりきったのだが、もっと技術を生かせる職場に変わりとく、5年前に念願になった形で今のポストについた。しかし、はじめは新規採用者なみにいろんなことを訊けても、いつまでもそうはゆかない。それに今の所に変わってからも5年になると、それなりのキャリアを期待されるので、とても応えられそうにない気持である。同僚は大学卒だとか自分と同期だがずっと技術の現場にいた人たちで、自信に満ちている。以前の同僚や後輩でも、大学卒は皆係長になっている。この年になれば出世欲も出て、それでいつもイライラしている。以前は明るくて、ゴルフをやったりいろんな人が来てくれたりしたのだが。もともと自分には躁鬱的な所がある。新しく買った家で両親と同居しているが、今まで貧しくて家ともいえぬ所に住んでいて、家を持つのが長い間の念願だった。ホッとしている。それもあって会社を辞めようと思い、親に反対され、いろいろ考えているうちに不眠になり、血圧が上って胸がドキドキすることがあり、睡眠剤でも貰うつもりで大学病院へ行った。会社を辞めれば1日16時間位がんばるつもり。友人の事務所、設計図の下書きのトレースをやれば一応の収入にはなる。5万でよければいつでも、と言ってくれているのがある。同僚が見舞いに来てくれて、ノイローゼでないようにふるまうと後で頭が痛くなった。薬はなるべくのめということだが、それではのまなくてもよいのか。(担当医あて、本人の状態、今後の方針などについて問い合わせの書状を持たせる。)

第5回 7, 5,

この1週間わりにおちついた。先日、大学卒の後輩で、自分が娘さんを紹介した人が、婚約の報告に来てくれた。以前はこんな風に対人関係も広がった。しかし、わり切っていたつもりが現実には大学卒におい抜かれてゆくとイライラするし、気分的にもいじけてしまう。家も出来たし姉妹二人は幸せな結婚をし、未婚の妹も裁縫教師になろうと学校へ行きだして、かなり頑張りがき

くと思うのでここいらで心機一転したい。自分はもともと文科好きで、某大学の文学部に合格した。夜間へも行けたのだが金の工面がつかなかった。シナリオ学校に通ったこともある。27～8才の頃何かやれたのだが父が癌になって出来なかった。同じ職場には高卒で平の先輩が沢山いるが、みんな腕に自信をもっている。自分にはそれがないので辛い。今は絵を習いに行っている。家族も心配しているし、自分にもとり残されそうな気分がある。間もなく病欠が90日になる。(医師の返書を持参、不安神経症とのことである。)

第6回 7, 14,

上司が、週一度でもよいから出てみたら、と言ってくれるので出るつもりである。又、週2回のパースの講習会にも通う予定。夜だから仕事が終わってからでも行ける。妻は古風な女で、舅姑によく仕え、ひっこみ思案の妹をよく連れだしてくれる。父は農家の出身で長男だが、家は叔父が継いでいる。近郊農家で今は大金持なので、父はそれに対してわり切れぬ気持ちをもっている。一生定職がなく母が早くから働きに出て、ずい分嫌な仕事もしたらしい。今でも20才位老けて見えるし手もすっかり荒れている。しかし、父はチャンと金を入れてくれていた、と言っている。同居の方が安くつくので一緒に住んでいる。妻の両親はまだ若くて元気である。高校の学資は姉が出してくれて、いまだに恩を感じている。妹も今度のことでしっかりやらねばと感じたらしい。自分は今まで仕事にかじりつく方だった。マジメというより人によく思われたいから。人は明るいと思っているが根は気が弱い。酒は強いが気を許すとメロメロになる。自尊心は高く、今まで人に自分の弱点を話したことがない。

第7回 7, 21,

先週は2回10時から4時まで出勤した。皆がいろいろ気を使ってくれて嬉しかった。いずれ会社は辞めるにしても、ハッキリした見通しをもってからにしたい。笑われるかもしれないが、どこかの廃村を買って同志と共に苦しくても頑張れたら、と思っている。又は、パースで独立したい。今でもアルバイトで1件3万円位になる。出勤する前に山へ行きたい。以前から山は好きだったが大抵単独行である。

第8回 7, 28,

パースの作品を見せてくれる。きれいに描かれている。父がこの頃ボケてきて、少し体調が悪いと医者と呼ぶのが面倒である。上司が8月11日から出勤したら、というのでそのつもり。今は週4回程出ている。出る以上は1週間単位で出てくれ、といわれておりまだスタミナに少し自信がない。一番下の妹は自分が親代りで短大まで出し、一番まともな結婚をした。休み始める前日、職場を抜け出して本屋に行ってる時にその妹が訪ねてきて、行方不明がばれて大騒ぎになった。職場でも家でも格好をつけてきていたので、それから急に崩れた。時間があればシナリオを書きたかったのだが、休んでいる間はとても気力がわかない。

第9回 8, 11,

先週から出勤している。暇だし皆が配慮してくれるのでまあまあである。パースの講習も続け

て出ている。父には若い時ずい分反発していたが、今はそれ程でもない。父は早くから勘当されて、本当の仏壇は叔父の所にあるのに、家には二つ仏壇があって、父方母方両方の法事をしている。もっとも父方の親戚が来たことはない。一度祖父が会社まで会いに来たことがある。従弟とつきあったことはあるが、金目当てと思われるような気がして中断。以前から35才までに家を建てたいと思っていた。妹も不憫がかかって面倒みてきた。父の兄弟の仲の悪さを見ているので自分たちだけは、と思っている。姉にはマザーコンプレックスめいたものがある。自分には豪放さと繊細さが同居している。母は跡継ぎの子を欲しがっている。

第10回 8, 18,

順調に出勤している。余り頑張るなど皆がいてくれる。以前自分のタッチした仕事を見て回っている。課長、係長は難色を示しているが若い人たちは支持してくれている。家庭の安定が実現したのだから好きなことをやりたい。20才頃妹と下宿していてイライラしたことがある。この年で自分にはまだ青臭い所がある。

第11回 8, 25,

デッサンとパースとそれぞれ2枚ずつ見せてくれる。油絵は手を入れたらかえっておかしくなったので次の機会にしたい、という。きれいなタッチで鋭いがもう一つの感じである。毎日出勤している。古い仕事を見て回るのは、どこか悪い所が判れば誰かの責任になるので上司は喜ばないのだと思う。今の仕事については、自分に基礎的な力がついてないので自信がなく、ちょっと冷くあしらわれるとガックリきてしまう。対人関係は必ずしも悪いとは思っていないのだが。

第12回 9, 2,

先週の金土と休んで久しぶりに山へ行った。体をこわしている友人を、その母に頼まれて連れていった。ドイツに行っている仲間から、というハガキを見せてくれる。釜崎のある詩人と友だちになりかけた。絵描き仲間ともつき合いがあり、ある版画家に貰った作品は今15万円もしているという。キブツやコミュニンに興味があり、安部公房が好きである。以前職場で読書会をやっていたが、又始めようという出している。日曜日毎にデッサンに通っている。パースも講習をうけてみて自分のやり方が所詮我流であったことがよく判った。貧乏には馴れているので人並みに暮せたらよい。面倒見のよい所があるので将来下宿屋でもと思い、妻に楽器の一つも覚えておけと言っている。この間あんまり貰ったら凄くこっているということで、やはり職場では緊張しているのかと思う。

第13回 9, 19,

パース1枚持参。小説書いているので読んでくれという。以前放送シナリオに何度か応募したことがある。大学ノートに何冊か書きためてある。仕事の合間の趣味ということでは満足しにくい。職場で大きい仕事を貰った。どうやら一人前である。毎日ランニングして体調はよい。パースのよい先生につけるかもしれない。

第14回 9, 29,

パス持参。余りよくない。しかし講習会では2～30人中3人が授業料免除の助手扱いになり、自分もその一人だという。もう1枚ヴィーナスのデッサンを見せてくれるが、これもよくない。妻に読ませたらあい変わらず暗いといわれた、といいながら小説を渡してくれる。一しきり文学談議。何かで自信を持ちたい、と言う。

第15回 10, 6,

小説、よくない。それについていろいろ話す。当分の間小説の代りに日記を書くこと、とくに詩を書くことを薦めてみる。できればパスで頑張ること。パス仲間は、金の入った時は豪遊するがなければ毎日ラーメン、といった生活だと楽しそうに話す。職場の方も大分忙しくなってきたが、何とかこなしている。

第16回 10, 13,

当分パス一本でゆくつもりだ、と新しい作品を見せてくれる。2～300枚描いてそのうちの5～10%を印刷して業者に回そうと思う。(今までの話から、私には、短時間でそれだけの数をこなすのは無理と思えるが、黙っている。)1枚3～5万円で月に三つ位注文があればと思う。文章の方は当分日記だけにする。職場の若い人が学会で発表するのに自分を連名者に入れてくれた。はじめの職場では、周りが大学卒ばかりで圧倒されそうだった。今の所なら高卒もいると思ったのだが、来てみると彼らとも差がついていて、それで焦ったと思う。今は知らぬことは知らぬと言って、わりに気楽である。

第17回 10, 20,

「文学界」の評論について。外国の長い作品を読みたいというので、ドストイェフスキなど薦めておく。デッサンに通っている近くで、60才位の服装も悪くない絵描きという人に声をかけられ(こちらがカンバスを持っていたかららしい)、帝展に10回入選した話の後で無心された。近くのホテルの支配人がその人の友人で、この絵を持っていったら飲ませてくれるから一緒に行こう、と誘われた、と嬉しそうに話す。プロとしてやってゆくには長い間の蓄積のいることがよく判った、と言い、今の職場に移った当座は専門書などもよく読んだのだが、などと言う。書くことの意味について少し文学談議。

第18回 10, 26,

カラマゾフの文庫本を出して、早速読み始めていると言う。時間中ずっと文学談議。

第19回 11, 10,

自分の甘さについて。同年輩の者と話していると、何もかもつい判ったことにしてしまうので、年上の指導者がいたらと思う。とに角作品が給料位にならねばと思うし、パスも本業と思っていない。ドイツに行っていた仲間が帰ってきて一晩騒いだ。若い同僚の新居のインテリアを頼まれ、公私共に多忙。

第20回 12, 1,

先月は50時間残業した。それでパスの方も1ヵ月休んだが、先週あたりから又通い出してい

る。今までタテマエとホンネの使い分けで混乱していたように思う。自分ではそうでないと思っ
ていても、実際はそれでしかないことが、ある程度判ってきた。だから会社を辞めるにしても、
せめて係長になって惜しまれながら辞めるようにしなければ、と思う。妻がパートに出たいとい
うので、自分のことを心配してかと訊くと、子どもも出来ぬかもしれないし将来店でも持てたら、
ということだった。自分の店と一緒にやれたらと思う。パースのアルバイトを頼まれ、それでボ
ーナスカット分位とり返せそうである。パースの学校の人は、自分がプロになるとは思ってない
みたいで、いろいろ雑用を頼まれ、今会誌の編集をやらされている。

第21回 12, 8,

パースでボーナスカット分とり戻した、と言うので年末の仕事かと思ったら、友人の事務所か
らの注文で、もう描き上げて金も入ったのだという。1枚5時間かかり3枚描いて一番よいのを
選んでもらった。描き出す前に構図など考えているとさらに5時間位かかる。B3位で1枚2万
円で2枚頼まれた。年末の方も、少なくとも3枚描いてくれ、報酬は10万円といわれている。昨
日の日曜は結婚する友人の新居の内装で一日つぶれた。3月になればパース学校の有志で作って
いる木曜会で展覧会をやるつもりである。(少し調子がよすぎてどこまで本当か判らなくなる。)

第22回 12, 22,

(15日は所用で欠席する者の電話連絡があったが、この日は無断欠席した。)

第23回 1, 12,

暮れの欠席は広島行きのためで、前に話してあるので判って貰えてる、と思っていた。自分と
しては、自分がどうして参ってしまったのか、又、なぜ立ち直れたのかももう少し考えたいので、
カウンセリングを続けたい。暮れから正月にかけてパースのアルバイトで、昨日までかかって何
人かで10枚仕上げた。それでボーナスカット分は十分回収した。この暮、定職のない芸術家仲間が
本当に苦勞しているのをみて、定職のある有難味をしみじみ味わった。アルバイト収入のよさは
定職あればこそである。

第24回 1, 19,

忙しい。かぜ気味で今日は休もうかと思った位。友人の結婚式のお膳立てをして疲れた。人前
結婚式ということで少し型破りだったので、予定通りゆかず気をもんだ。妻は毎日出勤している。
芥川賞と直木賞の話。やはり一つの事にうちこまねばなかなか賞は取れない。シナリオ学校で一
緒だった人で、トラックの運転手をやりながらガリ刷りの家庭通信を100号続けた人がいる。10
年の努力は尊いと思うが、さすがに近頃は疲れてきたようだ、と言う。

第25回 2, 2,

ここでいろいろ話して自分なりに一つの方向のようなものが見つかったと思う。不定期ながら
パース学校で講議をうけもち、1回2000円貰えるようになった。(次回より面接回数を2週に1
度にする。)

第26回 2, 16, 無断欠席

第27回 3, 1,

前はウッカリした。仲間で展覧会をやることになった、と言うので、木曜会かと訊ねると、いやパースの方だと答え、前と話がくい違う。パースの腕はどうやらアマチュアの域を超えたと思うが、今の会社の仕事にしてもプロの仕事であり、結局どっちつかずになるのではないかと不安である。パースだけでは十分オリジナリティを発揮しにくいので、少し巾を広げるためにグラフィックデザインを始め、妻のアルバイト先の店頭をやったりしているが、面白そうである。

第28回 3, 15,

展覧会は成功であった。早速ひき抜きの話がある。しかしパース一本でゆくのはやはり厳しく、金銭的には、大手の常雇いでも時間的にみれば今の自分たちとチョボチョボらしい。以前の上司で会社を辞めて新しい仕事を計画している人が、来ないかといってくれているが、自分にはその人につきあっていた頃の意欲がない。さし当って今会社を辞める気もなくなっている。妻の仕事はパートが常勤になりそうである。

第29回 4, 12,

前回の欠席について弁明。子どもの頃からのことを整理して書いてみたい。小学校の時、運動会でトップの間は頑張っているが、追いつかれるとやめてしまったりした。前に来てくれないかと言っていた上司が、今度の異動で榮転し、会社に残ることになった。やはり職場で認められることが大切なのだ、と思った。同年輩の同僚を見ていると、実にうまく切り切るのに感心する。職場で年間5万円程度本を買うのだが、現物が揃っていないので整理しようとしたら嫌がられた。仕事の上でもどうも自分は理想主義者のようである。パースもやってはいけるがプロともなるとなかなか難しいし、妻の仕事も、始めに思った程スムーズにはゆかぬみたい。

第30回 4, 26,

小さい頃の事を聞いて回る仕事も大変である。母は結婚前に水商売をしていたらしい。父も一時得意の時期があったのが、友だちにだまされて失敗した。父が勘当同様になってから、自分は母方の親戚に預けられた。祖父の家は農地改革で豊かになったが、父が金を費うので困ったらしい。それで帰還した叔父が家を継ぎ、それに対して父はいまだにひがみっぽいことを言っている。父と祖父・叔父とは殆どつき合いがない。従弟たちは何度か飲み連れて行ってやったが、叔父にさしとめられた。

第31回 5, 24,

異動があったが自分の望んでいる職場ではなかった。今まで自分のつき合ってきた人は平均以上の人が多く、それを標準にしてつい自分を駄目と思いがちだったが、人並みの仕事なら5年なり10年やれば誰でもできるようになる、と思うようになった。自分一杯の仕事をとっても、一種の夢で、ある程度現実と妥協してゆかねば仕方がない。(髪の毛を長くのばし始め、芸術家気取りなのか個性の発揮なのか、判断に迷う。)

第32回 6, 21,

風疹にかかった。病気になると弱気になって、異動で職場のランクが一つ下ったと人が見ているようで、中途半端な気持の儘で会社には、肝心なものを失ってしまうのではないか。思いきって新天地を目ざした方がよいのではないか、などと迷った。現実逃避の感じがするので賛成できないと答えると、それを言ってもらいに今日は来たようなものだ、と苦笑する。

第33回 7, 5,

かなり落ちついてきた。係長は相当厳しく自分の仕事をチェックしている形跡があるが、ひっかかっていないし、何とかやれているのだと思う。残業は殆どしない。以前はよく人を誘って飲みに行ったが、近頃は誘われなければ行かない。無口になった。パースの方も、注文があっても依頼主の気に入らなければ次から注文されなくなるので難しい。最近点字か手話法でも習おうか、と思っている。

第34回 8, 2,

だんだんさめた感じになってきている。職場の雰囲気も変わったみたいで、自分の発言に対する反応も以前と違っている。文学青年的発言に反響が薄くなり、もっぱら沈黙である。パースの方も、それ一本でやってる人はどこか違うし、自分の場合、月1枚注文があっても時間的には残業の方がわりはよい。

考察

さて、Jung (1970 a) によれば、人生の前半において現実的な環境の問題と対決した人間は、後半には自己の内界の問題に直面しなければならない。そのことが、最近しばしば問題になる中年期の反応性鬱病(笠原, 木村, 1976)の発症と密接に関わっていることは疑いない。現実世界での成功が、必ずしも内的な問題を解決する手だてとして役立たないからである。この人の35才という年齢は、この人が漸く人生の折り返し点にさしかかりつつあることを示している。当然この人は、今までさし当って問題としなかった問題に、あらためてとり組まねばならない。しかし今までにやって来た仕事、この人の場合、上述の Jung の意味からは少しずれているようである。この人にとって、自分の家を持つことは長い間の念願であった(第4回)。この人は今まで家らしい家に住んだことがなく(第4回)、小さい時から親戚に預けられ(第30回)、就職してからも妹と二人だけでアパートに住み(第10回)、おそらく家庭の団らんを味わうことも少なかったに違いない。だから現在両親と一緒に暮していることは、その方が安くつくというこの人のことば(第6回)とは裏腹に、家と従って家庭とを確保した安心感につながっており、だからこそ、長期欠勤の後のかなり不安定な時期に、家庭の安定が実現したから好きなことをやりたい(第10回)と言うこともできた。ここで注目されることは、結婚したことがこの人に自分の家庭を作った感じを持たせなかったらしいことである。この人の父親は、本当の仏壇は家を継いだ叔父の所にあるにもかかわらず、自分の家にも仏壇をおいて年期年期には法事を営んでいる(第9回)。それは祖父に対する嫌がらせ、又は叔父に対する対抗意識の現れかもしれないし、だからこそ父

方の親戚はその折り誰も来ないのであるが、やはり、家に対する執念のごときものを反映しており、母親も又実家の仏壇を持ってきている（第9回）こととあいまって、お互いの先祖をも含めた“われわれの家”という観念が、この家族集団においてはかなり強かったのではないか。だから、姉一人妹二人の間の唯一人の男の子であるこの人に、後継ぎとして家族中の期待が集まるのは、むしろ当然のなりゆきである。大げさにいえば、お家再興のための王子様であり、この人としては、好むと好まざるにかかわらず、英雄的役割をひきうけざるをえない。しかし父親は、結婚前に多少羽振りのよい時期があったらしい（第30回）けれども、結婚後は一生定職についたことがなく（第6回）、現在息子の家に厄介になりながら、少し体の調子がおかしくなると医者呼んで大騒ぎする始末（第8回）であり、父親としての役割を十分果していたとは思われない。せいぜいの所、いまだに残る実家の財産への未練（第30回）から、自分たちが正当な権利を奪われた存在であること、本来ならばこんなざまではなかったはずだ、という気位を植えつける程度のことであつたろう。このことは、この人の自尊心を高めるのには役立ったかもしれないが、——事実この人の自尊心は人一倍である（第6回）——、後にのべるいわゆる男性的同一化の対象としては、従って英雄としていかにふるまうべきかを示すことには、殆ど意味をもっていない。むしろ現実の自分をありの儘にうけ入れることを妨げて、容易に非現実的な空想の世界に逃げこませる危険性の方が大きい。そしてこの家を支えたのは、年よりも20才も老けこまねばならぬ程の、過重な母親の労働（第6回）であつた。それでもお父ちゃんはチャンとお金を入れてくれた（第6回）というこの母の述懐は、単に経済的だけでなく精神的にも、一家を纏めてゆこうとした母親の努力を物語っている。しかしこのような母親の努力は、図式的に言えば守りの姿勢のものであり、いわばなりふり構わず、ということは、他人の迷惑、他人との比較などまったく気にしないで、というよりその余裕すらなく、ひたすら自分たちを支えるための精一杯の営みでしかない。だから、この親たちが一時期子どもたちを親戚に預けねばならなかった（第30回）のは、こうした努力が、時に一家を支えかねたことを意味している。そうした事情が、一方で無力感と挫折感、他方自尊心と使命感を、二つながらこの人の中に育てていったことは想像に難くない。さて、この人の高校時代の学資は姉が出してくれた（第6回）。この人はいまだに姉に対する感謝の気持ちを失わず、むしろマザーコンプレックスに近いものを感じる、といい、妹の一人は短大まで出して結婚させ、もう一人の妹も自立できるまで面倒を見ている（第8回）。父たちの兄弟仲の悪さをみているので、自分たちだけは仲よくやってゆきたい、今日も結婚した姉と妹が家族づれで押しかけてきている、と楽しそうに語ってもいる（第9回）。つまりこの人は、自分に課せられた英雄的課題を何とかこなしており、その限りかなりの力量の持主であるし、一応の現実適応能力のあることは認めなければならない。ところがこの人は、20才の頃不安定になってイライラしたことがあり（第10回）、5年ごとにノイローゼになるのなら会社を辞めた方がよいかもしれない、と奥さんに言われている（第2回）。又、もともと自分には躁鬱病的な所がある、とも述べており（第4回）、今回の発症が必ずしも突然のものでないことを示唆している。すでにのべたよう

に、この家族のもつ家の観念は、すぐれて母性的なものであり、家とは何よりも自分たちを保護しうけ入れてくれる場所であった。父性原理が母性原理とどうかかわるかは微妙な問題であるが、少なくとも、それが比較する機能を含むことは確かである（河合1976, Jung, 1970 c）。つまり、人と比較することによって自らを定位してゆくあり方であり、その場合、たとえ比較に傷ついても、その事実をその儘うけとめてゆく態度である。多くの場合、こうしたあり方は父親とのかかわりを通して養われる。しかしこの人の父親が、徒らに過去の栄光(?)にしがみついて、傷つき挫折した自分をうけとめかねていたことは、すでにみた通りである。だからこの人が、父親との同一視を通して父性原理をとり入れることは著しく困難であった。

それに対して母性原理は、よい意味でも悪い意味でも、比較を超えたレベルのものである。家についていえば、それが他人の家より大きいかどうかによって自らの力を確かめようとする男性的あり方に対して、女性的態度は、それが悪い場でありさえすればよいのであって、他の人がどのように暮しているのかについては殆ど関心がない。もちろんどちらがよいというものではなく、男であれ女であれ、その両面をバランスよく発展させてゆかねばならぬことはいうまでもない。

さて、一軒の家を手に入れるのは一仕事である。しかしこの人にとって家を獲得することは、余りにも厳しい現実に対して、家族が身を寄せあい憩いうる場所を確保することであって、いわば絶対のレベルで安全な場所を手に入れようとする試みであった。それだけこの人にとって絶対的な条件が損われていたのだ、ともいえる。だからそこには、人との比較に基づいて積極的に現実世界で勝負しようとする姿勢が認め難いのである。そのようなあり方がいけないというのでは決してないけれども、相対的に自らを定位することなしに、真に安定した状態を手に入れることも難しい。はじめにのべた、中年までに現実適応をなしとげる、ということの意味は、いわばこうした現実的定位をさしている。その結果傷つくか思い上げるかはさして問題にならない。われわれの心は、しばしば Jung（たとえば 1970 b）が強調するように、われわれの思う程に思い通りになるものではないからである。要はそうした心の動きにどう対処するかなのであって、何れにしろ一応の安定を失わないようになるのが現実適応であり、いわゆるペルソナ（Jung, 1970a）の確立に他ならない。しかしそれは、しばしばおのれの劣等性に直面することを意味するし、いう程に容易なことではなく、いわば *Leidensfähigkeit* (Frankl, 1950) を身につけることである。だからといってこれを避けることは不可能であり、一見気づかぬようにみえながら、つまづきはどこかで感じられている。運動会でトップを走っている間は頑張れるが、追いつかれると勝負を放棄した（第29回）のは、すでにのべた自尊心ないし使命感と、無力感ないし挫折感のからみあった結果であろう。それはしばしばうわべを飾る恰好よさとなって現れ、マイナス面が暴露され恰好がつかなくなって急に崩れた（第8回）のも、そのせいと思われる。おのれの劣等性に直面した時、それに堪えるだけの力に欠けているのである。発症前からあったこの人の不安の原因である。それはとりもなおさず未熟さのあらわれなのであって、この人自身、どうもこの年で

まだ青臭い所がある（第10回）と気づいてはいる。

いずれにしろ、この人にとって家を手に入れることは、長い間いわば絶対的な条件であり、それによって究極的な安心が得られるはずであった。だから家を手に入れるまでは、すべての不安の原因は憩うべき家のないことに帰することができた。だからこそ、家の獲得がこの人の人生前半の課題となりえたのである。しかし、現在家がありながらなお不安が解消しないとすれば、問題の解決は別な面に求められねばならない。その結果この人は、いやおうなしに今まで避けていた問題、既述の男性原理にかかわるおのれの挫折感に直面せざるをえなくなる。

以上を要約すると、この人の今までの現実適応は、家庭要因に負う所が大きいとはいえ、いわば女性的な防禦的適応であり、家の獲得によってその目標は一応達成されたと考えてよい。しかしくり返しのべたように、男性的ないしは大人としての適応の問題はその儘今後に残されており、それはまず自らの相対的位置づけから始まらねばならない。この人は、かつての同僚や後輩でも大学卒はもう係長になっている（第4回）とのべ、自分としてはわり切っていたつもりだったのだが、とも言っている（第5回）。たとえば大学卒の後輩に娘さんを紹介したり（第5回）して、こだわりなく誰とも巾の広いつきあいを心がけてきたのも、大学卒と高校卒の格差を意識的に無視しようとした試みであったかもしれない。本音は、はじめの職場では周りが大学卒ばかりで、実は圧倒される思いであった（第16回）、ということであろう。新しい職場への異動を望んだのは、技術が生かせないというよりも、そうした息詰まるような緊張から逃げ出したかったのだ、と思われる。単なる学歴差というよりは、実力差にも気づいていた節がある。そして新しい職場に変わるのであるが、ここでも、これといった技術を身につけていない自分が、高卒の同輩ともかなり差のあることに気づかざるをえない（第1、2、16回）。おそらくそれは何年かのブランクのためだけではない。高卒で平の人も多いのに、彼らはおのれの技術に確乎たる自信を持っているようにみえる（第5回）。しかしそれは、前述の男性原理、つまり相対的に自らを定位した後の安定感、いわば大人のもつ落ち着きのようなものにすぎないのではないか。だからこの人のこれからの仕事は、より高い技術を身につけてゆくことよりも、男性原理、いい代えれば、自らの劣等性にたじろがないあり方をどうしてとり入れてゆくか、ということになる。この人は、今まで自分の将来を大人として考えたことがないので、ここいらで納得のゆく方向に進みたい（第2回）、と言っている。これは、すでに自分の家を持ち、一家の英雄として一仕事終り、そこであらためて世界に立ち向ってゆこうとする意欲の表明である。後にふれるように、その方向性には多分の甘さ、非現実性が残されており、したがってその克服ということをも含みながら、とに角、今まで十分に生きることのなかった一面を生きようとする始まりではあった。

もともとこの人は気の小さい人である。それには、憩うべき家さえなかった頼りなさ、うすうすは感じられている挫折感に目をつむっている不安とが、背景にある。だから、そもそもこの人がクリニックに現れたこと自体、退職金で借金を返せるかを確かめるためであった（第1回）。又、同じ仕事をしていながら、若い人より沢山の給料を貰うのが心苦しい、と言っている（第1

回)。職場でチャンとやろうと思い、マジメという評判である(第2回)。仕事にかじりつく方だが、それは人によく思われたいためであった(第6回)。要するに、いかに女性原理に埋没していたにせよ、われわれと同様、この人も他人の思惑を抜きにして生きてゆくことはできないのである。だからこの人は、今まで自分の弱点を他人に話したことがない(第6回)。勝負する気力には欠けていても、ポーズは失いたくない。真偽の程は明らかでないが、一期校の文学部に合格したことをくり返しのべている(第2、4回)し、職場の若い人たちが学会発表の連名者を選んでくれた、と誇らし気である(第16回)。金持の従弟におごってやったり、財産目当てと思われるとすぐにつき合いをやめている(第9回)。そういうこだわりは、父親の未練が、この人にまったく影を落していないとはいえぬことを示している。もちろん、そうした誇り高いありようが裏目に出ると、すでにのべたような挫折感を逃れることができない。その結果この人の新しい方向性は、いわば幻想的・非現実的方向に向わざるをえなくなり、たとえば、現在出勤できない状態にありながら、会社を辞めても1日16時間働けば何とかかなると思う(第2、4回)ことをくり返し強調したり、笑われるかもしれないが、と前置きしてのことであるが、どこかの廃村を買って一種のコミュニケーション的な生活を、と考えたり(第7回)している。この人の現在置かれている状況は、高卒の技術職員という現実であり、よくも悪くもそれで勝負してゆくよりない。もちろん、組織の一部というよりも自己完結できる仕事をやりたい(第2回)、というのは誰しもの願いであるし、そのためには、中年のある時期に方向転換しなければならぬこともありうる。しかしそれは、ある程度大人としてのペルソナが確立し、さらにそれを超えて生きてゆかねばならない場合のことである。しかしこの人は、今、自らのペルソナを作りはじめたばかりなのだ、といえるのではないか。そして、自分の相対的地位が自尊心のレベルよりも遙かに下回るのに気づいて、愕然としている状態なのである。そして、そのような“絶望的”な状況に立ち向う気力を失い、いわば戦線を離脱して、ロマンチックな新天地に新しい可能性を試そうとしている。たしかにこの人なりの感じでいえば、生活も安定したことだし、ここいらで好きなことをやりたい(第10回)、という気持は理解できるものである。しかしその好きなことが、前述のように空想の域を出ていないとすれば、この人の現実に対する認識不足、ほとんど気分動かされて客観的に物事を考量しにくい傾向を否定することは難しい。それは、まさに現実的な意味における経験不足を暴露するものである。

だからこの人は、自分がタテマエとホンネの使い分けに混乱している(第20回)のに、若い人たちが実にみごとに切り切っている(第29回)のに感心している。また、復職後早速以前の仕事を再検討しようとして上役に嫌がられたり(第10回)、図書の整理と称して同僚にまで煙たがられたり(第29回)したのも、一応善意から出て筋も通っているのだが、それで迷惑する人のあることに気づかないためである。自分を印象づけようとして、現実認識の甘さから、かえって評判を落す結果になっている。中断していた読書会を復活させようとしたり(第12回)したのも、同じ傾向の現れであろう。

この人の発症のきっかけは、脱サラ志向を親に反対され、以来不眠に陥ったことである（第4回）。この人の計画は、現実場面の挫折を空想的なロマンチズムで被い隠そうとするものであるから、常識的立場からは、誰しも反対せざるをえない。進退きわまって長期欠勤が始まったわけである。したがってこの人の職場放棄は、明らかに現実逃避であり、いわゆる管理社会から独立することの恰好よさはその通りであるにしても、それを実現させるだけの意欲や力がこの人にあるとは思えない。

しかし、この人のロマンチックな、それだけに非現実的な傾向には、もう一つの大きい背景がある。それは、おそらくこの人に青春のなかったこと、つまり、自らの可能性をやみくもに試すチャンスがほとんど与えられていなかったことである。この人はある工業高校を出たのだが、高校時代から文科好きで、就職後シナリオ学校に通ったり（第5回）、金があれば自費出版したい位の童話やエッセイを書きためている（第2回）。某大学の文学部に、それも入る力のあることを確かめるためだけに合格した。入学しなかったのは経済的理由からである。27～8才の時何かやろうと思ったが父の病気でできなかった（第5回）。高校時代無銭旅行に出る（第2回）ような所がある。この傾向は、現実場面で満たされぬものを、空想的レベルで実現しようとするものでもあろうが、この人の場合、すでにのべたように、あえて試すことをせぬことで幻想の世界を守る意味もあったと思う。この人は、会社を辞めた場合、さし当ってパースで生活しようと考えているのであるが、それについて正規の訓練をうけていなかった。休みはじめてかなりたってから、民間の講習会に通いはじめている始末である（第6回）。そして、本当はシナリオか小説を書いて暮したがっている。それも、仕事の合い間の趣味というのでは満足しにくい（第13回）、と言う。そしていろんな人とつき合って、たとえば釜が崎の詩人と友だちになりかけた（第12回）とか、欠勤中も絵を習いに行っている（第5回）のだが、絵描き仲間が以前にくれた版画が今15万もしている、などと言う（第12回）。大学ノートに何冊もの小説を書き、放送シナリオにも何回か応募した（第13回）。そしてたとえば、パース仲間が、金のある間は豪遊して、ない時はラーメンですます（第15回）ことや、ある老画家に無心され、その折り、その人の描いていた絵を抵当に飲みにゆこうと誘われたこと（第17回）に感激し、そのようなボヘミアン的な生活にたまらない魅力を感じているようであった。せめて20才台ならばとも角、60才にもなって見ず知らずの人に無心しなければならない佗びしさには、全然気がついていないのである。パースを何回か見せてもらい、デッサンを持って来たこともある（第11回）。しかし私の印象では素人芸の域を出ていなかった。読んでくれと見せられた小説（第15回）も、卒直に言ってプロのレベルには程遠い感じであった。しかしその時期、つまり第10回目頃から第20回目頃までは、ほとんど毎回パースの話、絵画論、文学談議に花を咲かせた。一つには、私なりにこの人の才能を見極めたいと思ったのと、二つには、この人に欠けていた、いわば *Sturm und Drang* の時期を曲りなりにも経験させたかったからである。

くり返しのべたように、この人の問題は、自分を相対的に位置づけるのを避けることから生じ

ている。そして、比較を超えたレベルで生き抜くだけの力は、今のこの人に備わっているとは思えない。そのためにこの人の想像力あるいは創造力が、現実逃避的な方向に費消されてしまうおそれがある。この人は多感な人である。この人なりの表現に従えば、人は明るいと思っているが根は気が弱く（第6回）、豪放さと繊細さが同居している（第9回）。おそらく絵と小説の好きな文学少年であったのが、主に経済的な理由から、それらに十分な力を注ぐだけの余裕がなかったものと思われる。その未練が、現実場面で挫折する度に甦り、自尊心を支えるためにも、この人を非現実的な方向に追いやるのである。だから、自分の才能についての吟味だけでなく、芸術家の背負わねばならない否定的な側面がほとんど配慮されていない。ここにもこの人の未熟さが露わであり、極端な譬えでいえば、巨人軍の4番バッターを夢みる少年ファンと変わらないのである。その意味でも、この人の可能性は試されねばならない。もし豊かな才能に恵まれているのならば、厳しくともそれを生かす道を歩むのも一つの人生である、と思った。この人はカウンセラーに対してさえ、表面を恰好よくとり繕う所がある。たとえばパースのアルバイトでボーナスカット分を回収したというものの（第21、23回）、前後の関係から話のつじつまが合わなかったり、奥さんがパートに働きに出る店の主人が、話の都合で義弟の友人になったりする（第24回）。一期校の文学部に合格した話も、カウンセラーとして全面的に信じていたわけではない。だからこの時期の芸術談議は、この人にとってかなり厳しい現実吟味という意味があった、と考えている。

そのうちこの人は、たとえばパースについて、今まで自分のオリジナリティと思っていたことが、要するに我流にすぎぬことが判ってきた（第17回）、と言ったり、仲間うちの話では判っていないことを判ったことにしてしまうので、年上の指導者がほしい（第19回）などと言いはじめ、プロになるには長年の蓄積が必要である（第27回）、自分はこうだと思っていても、本当の自分はそうでないことがある（第20回）などと言い、やがて、会社を辞めるにしても、せめて係長になって惜しまれながら辞めたい（第20回）とか、年末に友人の芸術家の苦勞しているのをみて、定職のある有難さをしみじみ味わった（第23回）とか、シナリオ仲間で10年間家庭通信を続ける人がいるが、さすがに疲れてきたらしい（第24回）などと言い、ついで、会社員としての自分もやはりプロである（第27回）、職場でそこそこに認められることの大切さが判った（第29回）、などと言うようになった。これは、プロだからといって必ずしも華やかな脚光を浴びるわけではないこと。自分の限界をうけ入れた上で、しかも自分のペースを失わないあり方に通じている。もちろんプロである以上、当然ある程度以上の技術が要求されるのであるが、それについては、自分は今まで平均以上の人とばかりつき合ってきて、そのために劣等感のとりこになっていた、しかし人並みということならば、5年なり10年一つの仕事をやることでおのずから身につくものと思う（第31回）、という微妙な発言をしている。また、小さい時からのことを整理してみたい（第30回）と言って、書くことへの未練を捨てきっていないし、パースと会社の仕事とが両方ともどっちつかずになってしまうのではないかと心配したり（第27回）、時には、会社でのラン

クが下ったと見られてるみたい（第32回）、と弱音を吐いたりしている。

しかし、他人との比較の上で自分の相対的地位を確かめてゆくのが男性原理であるとするならば、そうした原理をとり入れてゆくことこそこの人の課題であると思うし、カウンセラーとしては、いわば父親役をひきうけることによって、この人の現実性を確かめてゆくのが第1段階での仕事であったのだ、と考えている。したがって、この人の英雄的側面については、なお問題が残されているけれども、それは今後のことということになる。

要約

不安神経症と診断され、出勤できなくなった35才の既婚の男子技術系会社員との、約1年半にわたるカウンセリングの経過を報告した。母性的な家庭環境による父性原理のとり入れの失敗が、人生の後半にさしかかろうとする時期に、現実場面での挫折にともなって、クライアントを空想的、非現実的な方向に追いやって、それが長期欠勤につながったものと思われる。また、現実場面における相対的な位置づけを明確化することが、回復につながったと考えている。現在継続中のケースであるが、山は超えたものと判断している。

付記 本論文の一部は、第40回日本心理学会大会において発表した。

参考文献

- Frankl, V. 1950. Homo patiens: Versuch einer Pathodizee Franz Deuticke
Jung, C. G. 1970a Two essays on analytical psychology Collected works vol. 7 Princeton University Press.
Jung, C. G. 1970b The archetype and the collective unconscious Collected works vol. 9. part I Princeton university press
Jung, C. G. 1970c Alchemical studies Collected works vol. 13 Princeton University Press.
笠原, 木村 1975 うつ状態の臨床的分類に関する研究 精神神経学雑誌 第77巻 第10号 715-35
河合隼雄 1976 母性社会日本の病理 中央公論社
氏原寛 1974 職場内カウンセリングの2 ケースについて 日本心理学会第38回大会発表論文集 716-7
氏原寛 1975 カウンセリングの実際 創元社